

発展期の回顧

松 井 清

関西大学レスリング部の前進は、終戦間もない混乱期に同好会として発足しました。同好の士の情熱が実り、昭和23年に、体育会加盟の正式団体として認められました。以来昭和28年迄は、明治大学OBの村田恒太郎氏が初代監督として、レスリングの「レ」の字も知らなかった部員を何かにつけ指導者として面倒見て頂いておりました。氏が勤務のご都合で東京に帰られる事になり、その後の監督を私が引受けることに相成りました。

村田氏のご献身に心より感謝致すと共に、責任の重大なるを思い監督を努めました以後5カ年間の思い出を回顧しつつ、この記念すべき部誌の一頁に印したく存ずる次第であります。

昭和29年

29年5月にはアジア大会（マニラ）と世界選手権大会が東京で行なわれました。アジア大会では完全優勝を逸し、7階級の内6階級優勝、2位1階級と実に惜しい結果でありました。世界選手権大会では、優勝1階級、2位1階級、3位2階級、それに5位、6位各々1階級であり、その時のソ連が3階級優勝、トルコが2階級優勝、イランが1階級の優勝という事で、これら最強国に日本が列して名声を博しました。

さて我部では、この年は清谷主将以下、井上、清谷（弟）、清水、伊東、西海、梅本、などの部員が4回生におりました。

3月5日に創部以来初めてのアメリカ遠征日本代表選手の一員に、押立（当時OB）、と清谷（兄）主将の2名が選ばれ、神戸出帆のクリーブランド号で遠征の途につきました。アメリカ各地転戦の後、全米選手権大会に出場、グレコローマン・フライ級において押立が2位という立派な成績をあげてくれました。

このグレコローマンでのメダル受賞は、日本のグレコ史で国際大会での第1号であります。

3月27、28日の両日は東京青山レスリング会館において、アジア大会、世界選手権大会の選考会有り、横山が北野（慶大、ヘルシンキオリンピック2位）に準々決勝で敗れましたが、よく健闘しました。

3月31日から4月9日迄、春の合宿を関大道場で行ないました。

4月25日、第6回京阪神対抗大会には、横山、安川、大川、佐々木、坂、井上、古沢、清谷、梶原が出場し大阪が4度目の優勝をしました。

5月30日、日本とトルコの交歓レスリング大会が大阪府立体育館で行なわれ、トルコ⑨ー0日本と完敗を喫しました。この大会には我部より、横山、押立（OB）、清谷兄弟、下村（OB）、古沢（OB）、梶原（OB）の7名が出場しましたが、さすが世界の最強チームには一矢も報えず残念でした。

6月2日、春季リーグ戦が行なわれ、関大⑤ー4同大、関大4ー⑤関学となり、昨年の秋に引続き関学に名を成させしめましたが、秋季リーグには優勝できる目安がつかしました。

8月1日から9日まで鳥取において夏の合宿を行い、秋のリーグ戦に備えて、練習をみっちり行

ないました。

9月19日大阪YMCA体育館において秋季リーグ戦があり、関大⑦ー2同大、関大⑧ー1近大、関大⑤ー4関学、となり監督となり初の優勝を味わいました。昭和24年に初めてリーグ加盟して以来5度目の優勝で、この喜びをこれから絶対に他校に渡さぬように覚悟をきめて練習に励むことを部員一同に申し渡しました。

11月に、学生王座をかけて関東の覇者明治大学と戦いましたが、関大2ー⑦明大と涙をのみました。

11月、全日本選手権大会（東京）には、横山、岸本、北岸、佐々木、若林、清谷兄弟、宇賀、乾と大挙して出場しましたが、決勝リーグ戦に残ったのは横山1人で3者リーグの結果岩井（中大）に敗れ、大沢（慶大）に勝って2位となりました。この頃より横山が頭角を表わしだしたものです。

12月16日には昭和29年度全日本ランキングが発表され、フライ級横山が3位に、また敢闘選手として清谷兄が選ばれ、関大レスリングの名を一段と高めました。

この年の終り12月25日にソ連遠征がありました。終戦後は正式にソ連に入国したものがなく、これは画期的な行事でありました。ちなみに外務省が旅券の発行に困ったという話があります。ソ連の招請により発行になりましたが、日本の旅券で戦後のソ連入国第1号は八田一朗会長で、以下13号までが当のレスリング選手であると聞いております。

昭和30年

2月3日、昨年に引続きこの年も横山、清谷弟がアメリカ遠征日本代表選手に選ばれました。全米選手権大会では、フライ級において横山が、フリー、グレコともに優勝を成し、清谷弟がグレコのライト級の2位に入賞して、愈々レスリング界に関大ありとの名声をあげました。

遠征中の両君の所感の一節に次のようなものがあります。

IOWAでは相撲をやらされた。パンツの上にしき布を巻くという奇妙な格好でテレビに出演した。アメリカで相撲をやらされるとは夢にも思わなかった。続いて賭バクの街シカゴに入ったがさすがにブ気味な街である。パーデュー大では（インディアナポリス州）渡米以来初めて学生下宿にとまった。大学はほとんど田舎にあって街は大学を中心として形成されているようである。トレード、ニューヨークに向う途中ナイアガラを見物、その自然の雄大さには驚嘆するばかりだった。

だが寒さのため滝壺は凍結していた。これからいよいよ世界最大の都市ニューヨークに向う。ここが今度の遠征の最終目的地で全米選手権の開催地である。先ず世界最高層を誇るエムパイヤービルが目に見え込んで来た。ストーンジャングルという言葉そのままだ。近代文明の素晴らしさ、壮観さは全く“凄”の一言に尽きる。2、30階の建物が整然と林を形造っている様は全米でも類がない。自分達はマダソンスケアガーデンにいったが本堂にスポーツ・センターで日本にも馴染み深いハーレム・グローブ・トロッターズやプロレスの妙技、アメリカは全くショーで巧みにコミックとスポーツを融合させている。全米選手権はロングアイランド、アマタビル、ハイスクールで4日間に亘り挙行されたが日本チームは非常な人気で特に子供達には毎日サイン攻めにあい休む暇もなかった。横山（F）フリー、グレコローマン共に優勝、清谷（L）グレコローマン2位となりグレコローマンでは関大がチームとして第2位の栄誉を獲得した。大会終了後ニューヨークで映画「波止場」のロケ地を刑事さんに案内していただき興味があつた。

かくして2カ月間に亘る全米横断を終生の思い出としてニューヨーク飛行場を飛立ちストーンジャングルの夜影を眼下に帰途についた。（関大スポーツ）

この年は主将が横山（大半遠征で外国に出行していたので、後半坂が主将になる）、坂、浜野、福

田、宮崎、安喜、藤下などの4回生が中心をなしました。

4月24日、京都円山公園内の音楽堂において、渡米選手の歓迎試合が開かれ、横山、清谷弟はさすが遠征代表の実力を発揮してフォール勝の見事なできであった。

5月7日、大阪府アマチュア・レスリング協会の理事長に小生（松井清）が押されて就任しましたが、関大の強化とともに大阪のレベルアップを目標として新たに責任の重大さを感じました。

6月4日より春季リーグ戦が始まる。このリーグ戦より名城大が加盟して、関大、関学、同大、近大、名城大、八幡大の6校リーグとなり西日本の大学レスリングも隆盛の一途をたどりました。この春清谷兄弟、井上らのポイントゲッターを卒業させましたが、その痛手にもかかわらず、**関大⑨**—0名城大、**関大⑦**—2近大、**関大⑥**—3同大、**関大⑦**—2関学、と全勝の殆んどワンサイドの成績で二連勝し、愈々第1期黄金時代の足がかりを着々と建設しました。このリーグ戦の毎日新聞の予想は次のようなものでした。

関、関、同大の激突

◇関西学生レスリング・リーグ

毎日新聞社後援、昭和30年度春季関西学生レスリング・リーグ戦は4、5、12の3日間、同志社体育館で行われる。参加は関大、関学、同大、近大、名城大の5校で関大、関学、同大の上位3校の実力伯仲、全米選手権保持者の現役としての参加など興味をそそる点が多い。

関大 渡米経歴をもつ重量級の清谷兄弟が卒業したのでこれを補うために軽量級でよほどがんばらぬと宿敵関学に乗ぜられる。しかしフライ級では全米のフリー・スタイル、グレコ・ローマン両選手権を獲得した横山が作戦上補欠として出場する。彼が相手の足を制し、腕の逆でいや応なしにフォールに持っていく連続技の鮮やかさは今回のリーグ随一のものだろう。バンタム級岸本の1勝は期待できる。フェザー級には素晴らしい筋肉美を誇る坂本とネルソンはじめ強引な技を得意とする坂がいる。この級には関学、同大ともに良い選手がいるが、ことに同大には岩野兄弟がいるので関大の苦戦はまぬがれまい。

ライト級も新人選手権者丸谷がいるものの、大崎のいる関学に対しては不安だ。ウエルター級には関西学生レスリング界切っの怪力選手宇賀がいる。足取りの強襲で相手の気を奪ってフォールに持ちこむ試合運びにさらに巧さが加わったので、フライ級の横山とともに関大の双へきをなしている。

関学 技巧派の植木に望みが託される。フェザー級は荒山、奥村の進境如何にかかっている。ライト級は関学の野望を爆発させたいところで昨秋、関大字賀に食いさがった中西と昨年渡米後飛躍的に円滑さを加えた大崎がいる。ウエルター級の植田は新人選手権獲得以来調子に乗っているから関大字賀の大技の聞けきについてポイントをものにすることも予想される。結局関大と関学の間にはこれといった差はなく総体的な力強さという点でわずかに関大が勝ると感じられるだけだ。

同大 昨秋関学、関大に善戦したメンバーにほとんど異動のないのが強味。しかも岩野兄が全米フリー・スタイル、バンタム級の選手権を獲得したことが大きな刺激となっているからフェザー級の岩野兄弟を中心にフライ級の竹野、杉原、バンタム級の高橋が昨秋以上に健闘するだろう。だがライト級以上で実力が落ちる。

近大 技は未だだが馬力と闘志は相当なもの。ライト級神吉、片岡、ウエルター級岡見など重量級の物おじしい試合ぶりが注目される。

名城大 昨年の八幡大にかわっての遠征組だが、経験が乏しいから近大にどこまで……。

8月5日、ポーランドのワルシャワで開催されました国際青年スポーツ大会に、日本から初めて参加することになりました。日本代表として、織田幹夫団長以下陸上競技4名、レスリング5名、体操2名、卓球2名が参加し、レスリングに関大より横山選手が選抜されて参加しました。この大会には参加国23ヶ国でレスリングには15ヶ国が参加しました。横山はフライ級に出場、決勝戦においてソ連のツアルカラ・マユエデにラスト30秒前まで優勢に試合を進めておりそのまま優勝を成すかと思われましたが、余りにも勢いにのりすぎゴング寸前捨身の「かわず投」にかかり惜しくも2位に甘んじま

した。優勢のまま試合を流せば(わずか30秒たらず)優勝できたのに、と恐らく横山の一生の不覚であったと思われますが、このこと事体将来の人生のための良き経験の一つとなったことと思われます。

スポーツ選手として、はじめて中国経由ソ連からポーランド入りした横山選手がサンケイスポーツに送った興味深い手記の一節を次に紹介します。

北京の暑さには参る

◇…北京の暑いことには全く驚いた。裸で寝ていても汗が身体から吹き出すほど。風間君などは、夜中に“オーイ助けてくれ、暑くてたまらん”と、悲鳴をあげるしまつ。朝4時半起床して涼しいうちに練習にゆくことになったが、笹原さんと桂本君がみつからない。ほうぼうさがしたら、屋上の青空の下で毛布にくるまってぐっすり寝ていた。

練習を行なった中央体育学院は、2年制の体育指導者養成機関で、学生は寄宿舎生活をしている。設備もよく、立派な体育館もあった。ここの学院長の話では中国の青少年は平均してまだまだ体力がよいとはいえないので、スポーツできたえてゆくとのこと。また現在中国で盛んに行われているスポーツはバスケットボールだそうです。

全ソ農業博を見学

◇…27日に団長はじめ役員の方が到着、4日間汽車にのりつづけて暑さのために死ぬ思いだったといっておられた。正午発の飛行機は砂漠地方の天候が悪く中止、翌28日午前6時モスクワに向けて飛び立った。沙音山達、伊刺庫次克、新西伯利亚とつぎつぎ経て、砂漠や原始林をとび越えて午後2時頃モスクワについた。

出迎いのバスでモスクワホテルに宿泊、食堂で世界母親大会参加のお母さん達に会った。食後は全ソ農業大博覧会を見学。翌30日午後4時頃ワルシャワに到着した。

いよいよワルシャワ

◇…花束を持った出迎いの青年達や新聞記者、ニュース・カメラマンに囲まれて握手攻めに会う。空港には各国国旗が飾られ、市街中の家々には旗が立てられ美しい飾りつけが出来ている。こわれたレンガ造りの家が痛ましく戦災の跡を残しているが、ポーランド人はみんな明るく楽しそうだ。宿舎へ走るバスへはときどき通行人が立ち止まり手を振っていく。僕達も大きく手を振り返す。宿所は大学の寄宿所でエジプト、朝鮮、インドと日本が同宿。

エジプト選手と練習

◇…レスリングは試合が3日から始まると聞き1日からだと思っていたのが3日間の余裕が出来て大変ありがたかった。エジプトのレスラー達と一緒に練習した。彼等はわれわれとちがひ、グレコローマン(下半身は使えない)の選手だが、フリースタイルにも出るという。練習を見ていて身体の柔軟なことと首の強いのに驚いた、相手を自分の体の上にのせてあおむけに倒れ、首で支えてフォールする。軽い練習後、計量をしてバスで宿所に帰る。

大会中ワルシャワは各国から集った人々で人口がふくれあがり、交通も大混雑で、3両連結の細長い小さな電車の入口にまで乗客がぶらさがっている。バスや電車が走行中、停留所でない所から走って来て飛び乗りをやるのには驚かされた。運転手の方もとび乗り歓迎とみえて、どの電車も乗車口は全然しめないで開けたままだがわれわれからみると非常に危険で気になってしょうがない。

すごいザトベック熱

◇…8月1日午後4時から新しく作られたセントラルスタジアムで開会式がありスポーツ行進が行われた。各国選り抜き選手が集まっているのだろう。百名を越える大人数の国が多かった。日本代表選手は18名の少人数だが堂々とグラウンドを歩いた。チェコのザトベックの人気はものすごく、場内から“ザトベック、ザトベック”と合唱がわきあがっていた。

◇…試合は3日に開始。最強国トルコの不参加は残念だったが、ソ連、イラン、ブルガリア等14カ国68名の強豪が集まり文字どおりの激戦だった。

全員入賞の大活躍

◇…日本は笹原さんがどの選手も問題にせず優勝、僕がソ連に負けて2位、風間君が3位、兼子さんは決勝リーグで三者同率になりポーランドが兼子さんに判定で負け、ソ連にフォール勝ちして優勝したので兼子さんはポーランドに勝ちながら3位になってしまった。桂本君も、優勝したザンディ(イラン、1954年東京の世界選手権者)をフォールしたのだが翌日判定で敗れてしまい、5位に止った。結局、金メダル1、銀1、銅2の成績で全員が入賞した。

秋のリーグ戦は、10月2日より大阪YMCAで始まりました。関大⑨—0八幡大、関大⑧—1近大、関大⑧—1名城大、関大⑦—2同大、関大⑥—4関学、と春に続き3連覇を成しとげました。こ

の分なら当分の間連勝することができる見込みがたちました。

11月4日秦野国体(神奈川)に、関大より大阪代表としてフライ級横山(優勝)、ライト級丸谷(7位)、ウエルター級宇賀、岡山代表としてバンタム級岸本(7位)が出場しました。

11月12日よりの全日本選手権大会(東京・青山)には、横山、岸本、佐々木、坂、丸谷、宇賀、乾、若林、小中(現柏木)などが出場し、選手権大会終了後16日に関東リーグの覇者中央大学と王座決定戦を行ないました。結果は関大0-⑨中央と一方的な試合に敗れて、1日も早く関東と対等に試合のできる日のくることを念願しつつ帰阪しました。

11月24日、大阪府立体育館において全日本対トルコ・レスリングチームとの交歓試合が開催されました。日本代表チームの監督は小生(松井清)で、選手として横山、宇賀が関大より選ばれ、ヘルシンキ五輪以来一躍世界のレスリングの強国の一つにのしあがった日本が名門トルコへの挑戦でした。この大会は、水泳の日米対抗同様、次の年のメルボルン五輪の前哨戦と見られ、フライ級横山対ユリダエリシュは横山の判定勝ちにしてまず初の一勝をあげ、続くバンタム級、フェザー級、ライト級と4連勝し、ウエルター級の宇賀はギュンギュールにフォール負けとなり、ミドル級、ライトヘビー級と重量級が敗れ、結局4-3で日本チームが世界最強を倒して勝利を手中にしました。

12月関西選手権大会(ニュージャパン)でフライ級横山、ウエルター級宇賀が共に優勝、フェザー級佐々木、ライト級乾が共に2位となりました。

昭和30年度の全日本ランキングは、フライ級横山(2位)、ウエルター級宇賀(4位)と発表されました。

昭和31年

昨年世界の最強のトルコ・チームとの交歓試合に6戦中4勝2分と好成績をあげた日本レスリング協会に対して、イランのパーレビ皇帝より招待状がとどきました。イランはレスリングが国技で、皇帝が会長を務めるほどの熱の入れようであります。おそらくイランとしても、メルボルン五輪の年であり、日本と対戦しその実力を試したかったのでありましょう。日本としても強国の一つであるイランの偵察もあり、喜んでこの招待を引受けました。

イラン遠征日本代表レスリングチーム副団長に小生(松井清)が選抜されました。2月4日一行11名がイラン大使の招待パーティを東京帝国ホテルでうけ、同日6時より日本レスリング協会主催の壮行会に出席し同夜11時羽田発のインド航空で出発しました。主都テヘランで第1、2戦、アバンダンで第3、4戦を行ない1勝3敗の成績に終わりました。早くからイラン側は強化合宿でこの交歓試合にのぞんでおり、また観衆も認めるような審判の不公平などがあって、思うような成績をあげえませんでした。実際には5分の勝負で、実力的に差のない事が充分わかりました。この結果メルボルン五輪の対策が充分たつと共に、全階級入賞の自信を深め、2~3個の金メダルの予測もたてることができました。

1月29日東西対抗試合(名古屋)に本学よりライト級下村(OB)、ウエルター級清谷が出場、下村は矢田に敗れ、清谷は清水にフォール勝ちをおさめました。

3月12日、産経会館で「メルボルンへの抱負」と題して先のイラン遠征での見通しをおりませて小生が講演を行ないました。

5月13日、関西大学レスリング部創立以来後援会会長としてレスリング部のためあらゆる面倒を見て頂いた木村篤一氏（木村勝OBの尊父）がご他界せられ、OB、部員一同葬儀に参列してありし日を忍びながらご冥福をいのりました。

春のリーグ戦は、5月28日より神戸YMCAで行なわれ、関大⑧—1近大、関大⑥—3同大、関大⑤—4関学、と4連覇を遂げました。この年の4回生は、佐々木主将のもとに宇賀、尾崎、岸本、竹谷、岩田、大川、山根、岡本、増岡とその陣容を誇っておりまして。連覇をめざして春の合宿以来の努力が実ったのでした。このリーグ戦に先だって監督の立場で次の予想を投稿しました。

関西学生レスリング・関大松井監督の予想

西日本学生レスリング春季リーグ戦は28、29日、6月9日の3日間、神戸YMCA体育館で行われる。すでに各対校戦のメンバーが交換されているがいずれも優秀な選手を控えにもち、相手の出方をよく見たうえでそれに応じる策をとっている。ことしも参加5チームのうち関大、関学、同大の3校が強く、とくに各級にわたって確実なポイント・ゲッターをもつ関大の4連勝の声が高い。同チーム育ての親、松井監督にリーグの見通しを聞いてみた。

関大4連勝か 続く新人好調の関学勢

◇…自分の口からいうのも変だがやはり優勝は関大で、ついで関学、同大の順だろう。フライ級の横山（昨年の全米選手権獲得、ワルシャワ大会2位）とフェザー級の坂（主将）が抜けたが、昨秋のリーグ戦は横山（ワルシャワ大会参加）が出なくても優勝しているし、選手は4連勝を目指してかつてない熱心な練習を積んでいる。フライ級で岩田、バンタム級で河竹、岸本、フェザー級は主将の佐々木にライト級から下った丸谷（近畿新人戦ライト級優勝）さらにライト級に乾がいる。勝負はここまでに決まると思うが、もし4対4の同点となった場合でもウエルター級にリーグ随一の実力者宇賀がいるから大丈夫だ。

◇…関学は昨秋メンバー編成の失敗から近大に1敗し、4位だったフェザー級の奥村、佐々木、ライト級の大崎（全米選手権参加）と主力3人が卒業して実力が低下している。しかし新監督田村兄の好指導のもと激しい練習に励んで、鎌田（近畿新人戦フェザー級優勝）中田らの新人がめきめき腕をあげてきた。そのうえ昨年国体フライ級3位の田村弟、また昨年関西のバンタム級No.1として活躍した植木（フェザー級）がいるので関大にとって最も手強い相手である。

◇…昨秋2位だった同大は岩野兄が抜けただけで杉原、竹野（ともにフライ級）松本、高橋（ともにバンタム級）岩野弟（ウエルター級）と立派な顔ぶれを揃えているが練習相手に恵まれず全体に練習不足のようだから実力を十分に発揮出来るかどうか。まあ、関学に5—4、同大には6—3ぐらいで勝てるだろう。

メルボルンの五輪強化合宿が兵庫県の西脇市で7月16日より開催され、本学より横山（OB）、宇賀、佐々木等10数名が参加し実力を蓄えました。

夏の合宿は、京都東山の山紫水明の永観堂で行ないました。朝な夕なの読経の声が聞える静寂な環境での合宿、このような合宿は初めてで当時の選手は、「動と静」で心技体と修練できたことと思います。

9月6日よりオリンピックの最終予選会が東京の青山レスリング会館で行なわれ大挙して出場したが、入賞者がわず残念でありました。秋のリーグ戦は、春に引き続き5連覇を成し、第1期黄金時代を築いたのであります。当時の関学は「打倒関大」を目指しての好チームで、その間の5連勝は大変な苦労を伴ないましたが、それぞれに携わった選手の自覚がそれを成さしめたものです。

昭和32年

大量の卒業生を送りだしたこの年は、乾主将を筆頭に、小中、河竹、北岸、丸谷、若林、町田、河野らの4回生を中心に、連勝記録をのばすことを決意して新年度を迎えました。

5月下旬、春のリーグ戦では**関大⑦—2 近大**、**関大⑥—3 同大**、**関大3—⑥関学**の結果第2位になりました。大量のポイントゲッターが抜けたことが痛手となり6連覇の夢は消えました。予想においても関大の不利が表われていました。

関大の6連勝困難？

西日本学生レスリング

毎日新聞後援、32年度春季西日本学生レスリング・リーグ戦は23日、25日、6月2日大阪天六関大体育館で行われる。昨年の秋季リーグで関大は5季連続優勝をとげ、独走のかたちだが今春佐々木、宇賀、岸本、尾崎の4選手が卒業したアナが埋めにくく6連勝はむずかしそうだ。このためフェザー級までの迫力は半減、これまでの戦績から信頼されるのは粘りのあるバンタム級の西脇だけ、そのほかは戦績のない新人で実力は全く未知数だ。ライト級には1階級あげた丸谷が健在、金谷もかなり技に冴えがある。ウェルター級の乾は地味ながら粘りと力に加え宇賀（関大）の去ったあとの西日本学生の重量級ではまず第1人者だろう。

関学もフライ級は手薄になってしまったがバンタム級には荒らけずりながら素晴らしい闘志の鎌田がおり、強力な固め技でフォールをきめる植木がライト級からおりてきているからちょっと他校の歯がたたない。フェザー級を速攻の中田に最近進境著しい清水が固めている。ライト級の沖も伸びている。ウェルター級の中西は対関大戦にはライト級にさがって確実なる1点をねらうだろう。

同大も打倒関大を期してハリ切っているがフライ級の高橋をのぞくとやはり軽量級に頼れるものは見当たらない。この同大に対し近大が前季の勝利を再現しようと挑む一戦も興味がある。（毎日新聞）

8月8日、アメリカ・レスリングチームが、ロバート団長以下7名の選手で来日、日米対抗レスリング大会を大阪府立体育館で行ないました。日本代表チームにはコーチに小生（松井清）、選手としてライト級に乾が出場しました。

9月、全日本学生選手権大会（東京、青山レスリング会館）には西脇、乾、森川などが出場したが、好成績をあげることができませんでした。

10月国体、大阪代表として乾、森川の2選手が選ばれ出場、森川はウェルター級で8位になりました。

10月秋のリーグ戦には、春の雪辱を期し練習に練習を重ねた結果、**関大⑧—1 近大**、**関大⑧—1 同大**、**関大⑨—0 名城大**、**関大⑤—4 関学**、と全勝で優勝を奪還しました。これで、部員ともども「やればできる！」の実感をしみじみと味わいました。

11月、全日本選手権大会が大阪アベノ体育館で開催される。地元ということで、フリースタイルには、小中、三好、瀬脇、神谷、西脇、山本、木田、乾、丸谷、森川、と大挙して出場しました。今大会より日本で初めてのグレコローマンスタイルが取り入れられ第1回選手権大会となり、前記選手がこれにも出場して、フライ級に小中、ウェルター級に乾がそれぞれ第2位と健闘し「関大ここにあり」と大いに気をはきました。

昭和32年度全日本学生王座決定戦が11月30日、東京の青山レスリング会館で行なわれ、**関大1—⑧ 中央**と敗れました。この年のランキングは、グレコローマン、フライ級小中2位、同ウェルター級乾2位と日本協会より発表されました。

昭和33年

3月11日、この年のアメリカ遠征日本代表レスリングチームに、乾主将が選抜されて出発。八田一朗会長を団長として16名の選手が、全米選手権大会その他転戦試合を行なう。転戦試合では7勝7敗

1分と重量級の強い米国でよく乾は健闘をしました。

4月19日、昭和32年度の関西ランキングが発表され、関大勢ではフライ級小中1位、バンタム級西脇2位、同神谷5位、ライト級丸谷3位、ウェルター級乾1位、同森川2位でありました。

5月春のリーグ戦には、関大⑤-3近大、関大⑥-4同大、関大3-⑤関学となり、前年に引続いてポイントゲッターを多く送りだして、予想「昨年は春関学、秋関大とそれぞれ優勝を分けあっている。ところが今年のメンバーをみると関学は植木、中西の二人が抜けただけで、フライ級石田、フェザー級曾根、鎌田、ライト級清水、出雲と一応どこに対戦しても確実に勝てるポイント・ゲッターがそろっている。これに対し関大はレギュラーの小中、北岸、丸谷、乾と大半を卒業で送り出して確実にポイントをあげられるのはバンタム級西脇一人、ウェルターの森川は関学沖とは互角で、関大の不利は否めず、まず関学優勝の公算大である。しかし関大としても、そうたやすく敗れるとは思えない。」の通り、苦戦の結果2位に甘んじました。

6月23日、関西選手権大会には、フライ級市口2位、バンタム級西脇1位、同住本2位、同山本3位、フェザー級岡本3位、ウェルター級乾(OB)1位の結果の好成績をあげる。

8月夏の合宿を淡路島洲本で行なう。春のリーグ戦で2位に甘んじ、秋には捲土重来すべく西脇主将以下、森川、岡本、盛本、村田の4回生を中心に市口、福家等12名にのぼる大量の新入部員を加えて思いきった練習をしました。新人に期待して、指導陣もそのしがいがあり、ここを出発点として第2期黄金時代の基を築くべく心新たに思いをよせる。それがため新人部員には技術よりもまず体力をつけるために、合宿中はトレーニングに重点をおき、「体力向上」に務めました。おそらくこの合宿程トレーニングをやったことはなく、部員一同も「殺人的トレーニング」に悲鳴をあげたのではないと思われる。

10月秋のリーグ戦にも、関大⑧-3同大、関大⑨-2近大、関大3-⑤関学となり、春に続いて2位となる。おそらく明年度も多くのポイントゲッターをかかえた関学の全盛であろうと思うが、何とか今春入部した新人より傑出した選手がでることを祈って涙をのんだ次第であります。

11月16日よりの全日本選手権大会には、西脇が健闘して5位に入り、また関大柔道部OBの重岡がレスリングに転向してヘビー級に出場第3位に入賞した。

11月国体大阪代表として、監督松井清、フライ級横山(OB、3位)、ウェルター級宇賀(OB、5位)、ミドル級乾(OB、4位)、と好成績をあげた。この国体では山口県代表として重岡(柔道部OB)がヘビー級で優勝している。